

金光大神との出会い

はじめに

ご紹介に預かりました、立命館大学の桂島と申します。

金光教のみなさま方の前でお話をするというのは、私、初めての経験でございまして、正直言いまして恐縮をしておる次第でございます。また先ほど来、このフォーラムやこれまでのいろんな経緯なども別室でおうかがいをしています、果たして私のようなものが、ここでお話をすることがふさわしいのかどうか、内心忸怩たる思いが今しているような次第です。

実は金光教には、これからお話をさせていただきますが、たいへんお世話になっておりますし、今さら逃げるわけにもいきませんので、私が金光教、あるいは金光大神というものに出会った体験なり、あるいはその中で考えさせられたことなどを正直に申し上げることで本日の責任を果たしたい、と考えている次第です。

ただ今ご紹介の中にもありましたように、私は日本史、日本思想史、宗教史、特に江戸時代から明治時代のところを、主として専門にしています。わかりやすく言いますれば、金光大神、恐縮ですけども歴史学の方では赤沢文治と呼び捨てにしているわけですけども、赤沢文治の人生の時代が、実はほぼ私が専門にしている時代ということになるかと思えます。従いまして、だいたい十九世紀の前半から後半にかけてという辺りが私の専門としている時代です。その中で、どういう形で赤沢文治、金光大神と出会い、またその時代からどういうことを私が受け止めたのかといったようなことをお話しさせていただこうと思っております。

その前に、ざっくばらんに申し上げますと、これはややリップサービスのようなところもあるんですけども、私は大学で一応日本史、特に民衆史といったような事柄を授業でやりますけれども、その際に『おかげは和賀心にあり』というビデオはしばしば活用させていただいております。あのビデオは歴史教育の観点からみましても、ないしは実証的な視点からみましても、非常に優れたビデオではないのかなと思っております。事実、あのビデオは学生諸君には非常に好評です。あのビデオを見て、あの時代に興味を持ったり、あるいは民衆宗教というものがあるんだということを知るようになる学生はずいぶんおりま

す。高等学校の日本史の教科書には、天理教、金光教、黒住教という名前が出てくるだけで、それ以外は何も出てきませんから。さらに言えば、教科書では最初から教派神道というふうに紹介されているわけです。従って、ご承知の方が多いいんじゃないかと思うんですが、教派神道というのは、明治になってからそういうふうになったわけでありまして、なかなかその辺がピンとこない若い方が多いんですけども、あのビデオを見ることによって、非常に興味を持つ、あるいは非常に今まで持っていたイメージとずいぶん違うということで、感銘を受けている学生諸君が非常に多いように思います。

ついでながらまた申しますと、昨年、私は半年北京で、中国の大学院の方々をお教えするというか、指導する機会に恵まれたんですけども、中国へもこのビデオを持ってまいりました。私の思い過ごしかもしれませんが、『おかげは和賀心にあり』を北京で上映したことはまだないんじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。私がひょっとしたら、初めて中華人民共和国で上映してきたのではないかというふうに密かに思っているんですけども。これも、中国の若い方々に非常に興味を持っていただきまして、事実、その中のある方は民衆思想の研究をやりたいと言っております。まだ中国におられますので、そのうち日本に留学してくるかもわかりませんが、その際にはまた金光教のみなさま方、あるいは教学研究所の方に連れて行こうかなと思っております。

というふうに、大学の場合、あるいは日本史や日本思想史の場合、金光教といわれているものを取り上げたり、そういうものを学生諸君に触れてもらう機会というのは、実は近年はそんなに珍しいことではなくなっているのではないかなと、私は推察しております。特に『日本思想大系』というものが出来まして、ご承知の方もいらっしゃると思いますが、その第六十七巻に『民衆宗教の思想』という巻がございまして、あの中に『金光大神覚』、あるいは『ご理解』ですね、理解の方は抄録になるかと思っておりますけれども、収められておりまして、比較的触れる機会が多いように思います。従いまして、大学の歴史教育の場合などでは、比較的金光教というのは取り上げられるようになってきたということをご紹介を申し上げようと思って、最初にお話しさせていただいたわけです。

ただ、今お話し申し上げましたように、それは最近の、というふうに申し上げましたけれども、そこにはそれなりに意味がありまして、私は現在、四十七という年齢なんですけども、私が二十代の頃、日本史というものを勉強しようと思った頃には、実はほとんどそういうものが取り上げられたり、あるいは触れるということは少なかったというふうに思います。もちろん、著名な先生方がすでに何人かいらっしゃることは事実なんですけども、まだ『日本

思想大系』が全部出ておりませんでしたし、あるいはさまざまなそういう民衆といわれているものに注目する研究、ましてやその民衆の宗教や思想に注目する研究というのは、非常に少なかった時代だったと記憶しております。

従いまして、歴史学というものの中で金光教というものに出会ったということは、特に二十数年前にはかなり大きな衝撃だったというふうに思っております。

そういう意味では、最初に歴史学徒として、まず金光教というもの、あるいは金光大神というものが、どういうふうに衝撃的なことだったのかということからお話をさせていただこうと思います。

一、歴史学における金光大神との出会い

金光大神との衝撃的な出会い

ご承知のように、金光大神がお生まれになったのは、文化十一年（一八一四）ですね。そのあと明治にわたる時期というのは、日本史における時期区分では、相当有名な時代に当たっております。主として幕末維新时期とって、今でも非常に人気のある時代であります。実は私自身も、近代史、近代というものを考えるために、その最初の出発の明治維新、ないしは幕末維新というものを研究したいというふうに思いまして、このジャンル、この時代に入ってきた者なんです。特に、幕末維新时期の思想とか宗教というのは、非常に興味がありまして、そういうものが近代以降に日本の精神構造とか宗教構造にどういうふうな影響を与えたのか、あるいはそういったことが現代にどうつながってくるのかを考えたいなと思ひまして、この時代を選んだ次第なんです。

ただ、非常に有名な時代でもありまして、これは今の学生諸君もそうですし、私もそうだったわけですが、目がどこに行くのかといひますと、これは言うまでもありませんが、吉田松陰とか、あるいは西郷隆盛とか大久保利通とか木戸孝允とか、これは維新三傑と言われておりますけれども、あるいはこれも今でも非常に人気が高いんですけども、坂本龍馬とかですね。おそらく司馬遼

太郎の小説の影響なんかがかなりあると思うんですけども、そういったところにどうしても目が行くわけです。

また事実、テレビドラマなんかでもそうなんですけども、この幕末維新时期というのはドラマとして見てる分には、非常に激動的でおもしろい。また、いろんな政治的な動向などが目まぐるしく動いていく時代でもありまして、その意味では非常におもしろい時代であります。私もそういうことにある意味で引かれましたし、事実、必ずしも私の引かれ方というのは例外ではなくて、今でもそういう学生諸君というのは、比較的多いんじゃないかと思います。

そういうときに、生神金光大神に出会うことになったわけなんです。それは、最初は、当時出ておりました研究書、具体的に言いますと、故村上重良先生の研究書とか安丸良夫先生の研究書とか、『日本思想大系』といったもので出会ったわけなんです。ただその時に私は、思想の内容とか民衆的な思想がこうなんだといったようなことに興味を持ったというか、そういうことに引かれたのではなくて、実はそういうものを読み進め、あるいはさまざまな金光教祖の生涯などを調べていくうちに、私にとっては一番忘れることの出来ないくらい強い衝撃を受けたのは、今申し上げましたように、幕末維新时期というのは、非常に目まぐるしく時代が動いている、あるいは非常に華々しい政治的な動きがある、でもそのときにひたすら広前に座り続けて人助けをしていた人がいたんだということです。このことは私にはすごい衝撃的だったことであります。ややもすると、当然、派手な方にわれわれは目が向きますし、あるいは歴史というと、どうしても政治的なリーダーとか政治的な事件というものに目が向くわけですけども、そういうまさに同時代に浅口郡金光町に座り続けていた人がいるということに、私は非常に衝撃を受けたんです。つまり、それまで民衆という言葉はすでに歴史学の中にも入っておりましたし、あるいは民衆の視点から、民衆的とかいう事柄はいくつか私も勉強をさせていただいていたんですけども、今から振り返りますと、この金光教祖、金光大神の事実、そういうものに衝撃を受けたということは、それまで私が理解していた民衆的とか、民衆史とはだいぶ違う揺さぶりを与えてくれたように思っております。

民衆史観の転換

それはどういうことかと申しますと、実はそれまですでにいわれておりました民衆史とかあるいは民衆的というのは、たとえば百姓一揆とか、あるいはこれまた華々しく活躍する民衆、それは当時の歴史に対する見方というものの影響もあるんですが、圧政に対して戦っていく民衆みたいなものが、どうしてもそれがクローズアップされる。戦闘的な方が格好いいということですね。そういった事柄にどうしてもこれまた目が向く。

従いまして、先ほど申しました幕末維新史の研究と、ある意味では非常に似通ったようなところで民衆が捉えられている。つまり、吉田松陰や西郷や大久保のようなリーダーではないにしても、結局、かなり激しく運動をし、活躍をし、またそういうものを捉えることが実は民衆史であって、ないしは民衆的なことを捉えていくんだという理解が、当時の歴史学ではまだ非常に強く残っていた時代ですね。また私自身も、民衆というものを捉えていくんだというとき、そういうふう理解をしていたわけなんです。

そういう理解から見ますと、まさに激動の幕末維新期に座り続けていた人というのは、一体どういう人なんだろうということですね。あるいは、そのことが持っている力といいましょうか、そのことを歴史学の中でどういうふう位置づけるか、あるいはそのことを私は何としても歴史学の中に位置づけたい、さらにはいえば、その座り続けていたところから日本史を捉え直すというのが、おそらくもっと民衆的だと申しますか、ないしは今までの民衆史とは違う、より日常的な民衆の世界と申しますか、あるいはもっと身近な民衆の心の世界と申しますか、そういったレベルから日本史を捉え直していく。そこから日本史を見ていくことにつながるのではないかとということです。そういった予感にも近いことが実はありました。そういう意味では、ひたすら座り続けていた教祖というものが、私の中では、実は金光教の中での、金光教に対する一つの出会いの中での、まず最初の体験であったというふうに言っているのではないかと思います。

その後、二十何年間、金光教からはいろんなことを学ばさせていただき、後にお話ししようと思っておりますが、教学研究所の先生方ともずいぶん親しくさせていただく中で、いろんな知識量と申しますか、いろんな事柄が増えていったわけでありましてけれども、最初にイメージした像というのは、未だに変わっておりません。大学で授業をやるときにも、金光教のお話をさせていただくときには、常に幕末維新期に座り続けていた人がいると。ひたすら座り続けて、しかもお祈りをし、人々のお話をうかがい、いわゆるお取次をして、人々の難儀を救う活動をしていた人がいるんだということは、私は一番最初に今でもお

話をしております。また私自身の金光教との関係と申しますか、その中では未だに揺らがない、ないしはその像というのがますます堅固になって、原点にあるということですね。そのことをまず最初に申し上げさせていただきたいと思っております。

『覚』の輪読

もう一つ、これは余談になりますが、金光教の大阪の教会にうかがわせていただくときには、どうしても触れないわけにはいかない話なんです。

当時、初めて金光教というものに興味をもって、さあ、何から勉強をしようかというときに、『金光大神覚』というものが幸いなことに活字になって、比較的簡単に読むことができました。私の記憶が正しければ、おそらく最初は『日本思想大系』のものを見たのではないかと思うんですが、その後は、教学研究所の方にうかがわせていただいた後には、いわゆる写真が片側に載っているものを使わせていただきました。今の教典が出る前だったと思います。一九八三年からは、現在の教典を私も買って使わせていただいている、これを中心にいろいろ勉強をさせていただいているんですけども、とにかく『覚』を読んでいこうということで、読み始めたんです。

最初はよくわからないところが多かったんです。一つは方言が多い、岡山の言葉が多いということがあります。なかなか理解できない箇所が多くて、これをどういうふうに考えたらいいんだろうかということで、そのときに、これも今から思えばまさに天佑としか言いようがないんですけども、非常に身近なところに、ちょっと名前は控えさせていただきますが、金光教阿倍野教会の、お母さんが非常に熱心な、本人もその意味では信者さんなんですけども、私の見るところ本人よりもお母さんの方が熱心だったんじゃないかと思うんですけども、そういう方がちょうど立命館の日本史の学生でいらした。当時、私は大学院にいたんですけども、その方とちょうど同じ研究会で出会って、私は今こういうものを読もうと思っていると言ったときに、パッとその方も反応してくれまして、そういうことなら一緒に読もうかということになりました。これには私は非常に助かったんですね。ですから、私が金光教に関して初めて論文を書いたときに、その最後のところにその方の名前を掲げさせていただいているんです。

けども、その方がもしいなかったら、私はその『覚』というものを読みながら、いろんな言葉とかそのイメージをふくらませていくことができなかつたんじゃないかなというふうに思っています。

そういう意味では、今でもその方、さらには阿倍野教会には非常に感謝している次第でありまして、そのことも個人的には今回、ちょっとドキドキしながらもお話しさせていただこうかなと思っている一つのきっかけなんです。

その方とは、約一年ほどですが、一行一行、一字一字といきますか、しかも後には、写真版を買わせていただきましたので、それで確かめながら、いわゆる万葉仮名調の文字で書かれている『覚』を精読をさせていただいたんです。もちろん、今でもどこまで理解が正確なものかどうか、とんでもない読み間違いをいっぱいしているんじゃないかと、思っているんですけども。

問題へのアプローチ

当時は、どうしても引がかかって読めずに、どう考えたらいいのかわからなかったところで、やっと最近、何がしらのことをしゃべれるようになったことの一つに、病氣治しということがあります。これは、病氣治しというのはテキストに出てくる言葉ではないんですけども、当時の民衆の、ないしはそういう宗教の病氣を治すというのは、一体どういうことなんだろうかということですね。これは、当時のことをずうっと読み進めながらも、おそらくそこに大きな意味、ないしは金光教祖の活動を考えていくときの一つの大きな問題がある。そこにもう一度アプローチしないと、どうしても理解ができないのではないかという気がしたことがまず一つですね。これは、そのままどういうふうに考えが変わってきたのか、後ほどお話をさせていただきますけども、とりあえず、当時これが一つでありました。

それからもう一つは、神様の言葉をしゃべるということは一体どういうことなんだろうかということですね。これは、歴史学の方では、端的に神懸かりという言葉を使わせていただいておりますけども、この神懸かりという言葉、これ自身が相当の引っかけりを持っていて、なかなか素直に読めない。そういう意味では、その辺のところはどういうことなんだろうかということ、私はなかなか長い間、わからずじまいでした。ただそこを捕まえていかないと、お

そらく当時の民衆宗教といわれているもの、あるいは金光教、さらには天理教とか黒住教とかもそうなんですけども、そういうものを理解したことにならないだろうということでした。

その後、そのことについてはずうっと悩み考え続けてきて、今は大学の授業でも説明はしておりますけども、これは当時、まず引っかけたことですね。これはかなり鮮明に覚えております。これをどうやって合理的に説明しようかと。結局、われわれのような学問の世界にいる人間というのは、当時のいろんな研究書もそうなんですけども、みんな合理的に解釈するわけです。ちなみに、村上重良さんというかなり有名な、もうお亡くなりになりましたけども、戦後のこういう研究では第一人者とでもいうべき、先駆者とでもいうべき、研究者は、まあ治ったような気がしたんだろう、みたいな説明をしておられます。あるいは、これは現在もご活躍の先生ですが、ちょっと名前は差し控えますが、その先生などは、そういうものは呪術的なもので、いずれ乗り越えられなければならないものなんだというふうに説明をしておられるわけです。私は私自身もそうだったと思うんですね。なんとなく合理的に説明しなければならない。今ではそれが、たぶんこういうふうに考えたらいいんじゃないかということをしてその後、思っていることがございます。これも後ほどのべさせていただきます。

『覚帳』の衝撃

それからもう一つ、『覚』を読み、さらには一九八三年に、『金光教教典』が私たちにも読めるようになったということで、初めて『覚帳』というものに触れる機会ができたわけです。それまでも教学研究所の方には、八十年に入っただけからお世話になりまして、しばしば調査にうかがわせていただきまして、教学研究所の方のご厚意で、ほんとはこんなこと言ったらよくないんですが、これは部外秘だというふうなものも見せていただいたことがあるんです。私はそれを公表したこともございませんけれども、そのときは、教典を編纂中であるということはおうかがってございましたけども、ただやはり、金光教の教典が出来上がって『覚帳』というものに触れた、これが私はもう一つ、次の衝撃だったということは申し上げてもいいんじゃないかと思っております。

それはどういうことかと言いますと、『覚』というものは、『お知らせ事覚帳』をおそらくもとにしながら、明治に入ってから書かれたものなんだというふうに思いますけれども、従ってその意味では、『覚』と『覚帳』というものは、当然一体のものなんだと思います。『覚』には書かれていない事柄があるとか、あるいは『覚』が終わってしまった後の時代、その部分も含めてかなり詳細に書いてありまして、私はやはり『覚帳』の方を見ながら、『覚』よりもはるかに近代という時代の中での金光大神の葛藤というか、失礼な言い方かもしれませんが、あるいはその中でさまざまな悩みというんですか、近代という中で非常にさまざまに苦悶している教祖の姿というものに出会って、これが第二の衝撃だったわけです。これは申し上げてもいいんじゃないかと思います。

近代化という問題

と申しますのも、たとえば村上重良先生が、『金光大神の生涯』という本を講談社からお出しになっていますが、あそこの近代編の部分というのは、まったく違うことが書いてあるんですね。たとえば、金光大神にとって明治維新は非常に希望に満ちた時代であって、あるいは太陽暦が採用されたのも、それまでの金光教祖の主張がようやく認められたので、非常にうれしく思ったみたいなことが書いてあるんですね。私は一体あれは何を典拠に書いた本なんだろうと、今でも思っているんです。正確に言いますと、あれは典拠もなしに書いたもんなんだということは、今は確信を持って言えますけれども、どうもそういうイメージの方で、私たちは金光教を捉えていました。

つまり、それまでの研究というのは、金光教というのは非常に近代的な宗教で、非常に文明開化的な宗教なんだというふうにいわれておりましたので、実はどうもそういうことではなくて、近代という時代の中でのものすごく軋轢なり、それが生々しく『覚』にももちろん書いてあるんですが、それよりも『覚帳』の方に結構書いてある。私はそのことが次に相当揺さぶられた思いがいたしました。実は近代というものが、どれだけ人々の生活や、あるいは人々の内面、宗教や信心の問題を含めてですけども、そういうものに大きな揺さぶりがあるいはやや強くいえば混乱、動揺と変化、変質というものをもたらしたのか考えるようになりました。しかもそのことが民衆世界をどういうふうに変えてしまったのだろうか、ということですね。そのことが、『覚帳』などを読みながら、

ずうっと考えさせられた点でありまして、実はこの点は現在に至るまでの私の研究テーマと言ってもいいテーマになっております。

もう一度まとめて言い換えますならば、明治維新以後の近代というものが、民衆、人々の生活、心、いろんな思いにどういう亀裂を与えていったのか、さらに最近では、私はそれによって一体何が見失われたんだらうかということをもう一度考え直すことによって、もちろん戻ることなんか絶対できないわけですから、そのことによって現代というものを捉えていくことができるんじゃないかと、最近では考えているんです。そういうものとして、金光教との出会いの第二段階があったということです。

「神懸かり」ということ

ところで、先ほどの病氣治しとか神懸かりということに関しましては、ここにいらっしゃる先生方に、私の理解が間違っているならば、後でご指摘をいただきたいんですけども、今現在、大学の授業でどういうふうにしちゃべっているのかということをご紹介申し上げます。

私は、二十四、五年、金光教というものの研究を始めてから、それなりに悩んだ上で、得た結論なんですけども、一つは、神懸かりの方が説明しやすくなったなあということで、一応大学でしゃべっていることなんです。それは、神様の声が聞こえなくなったのが近代であるということ请务必言うようにしているんです。従って、われわれはややもすると、近代的価値、近代的なものの見方というものを江戸時代に持ち込んで、江戸時代というものをそこで裁いてしまう。あるいは、江戸時代というものを見下してしまう。歴史学の中ではしばしばこういうことがあります。つまり、現在の価値、高みの見物的に江戸時代というものを見る。現代の方がはるかに優れているんだという前提で江戸時代を見る。あるいは江戸時代というのは、遅れた時代であるということで捉え返してしまう。ただ、そういう見方は正直言って全部間違っているというわけではもちろんない。人々の営みが一生懸命積み上げられてきたさまざまなもの、そういう意味では英知や努力の結晶というのは、現代まで伝えられているわけですから、ある部分は確かにそういうことはあるんだと思います。ただ、その

ことで全部割り切って、徳川時代、江戸時代というものを見てしまうと、これはどんでもない過ちを犯すと。

私はそのことについて、たとえばこういう民衆宗教、あるいは金光教というものからはずいぶん教えられるんだということを今大学でしゃべっています。その一つにたとえば、神懸かりということがテキストには書いてあるんです。これはふつう学生諸君は、たじろぐんですね。ないしは、なんじゃらほいという反応がだいたいまず最初に返ってくる反応です。あるいはもっと強くいえば、おそらく何やら怪しいものであるというふうに、今の学生諸君も当然そういう見方をしちゃう。そのことに対して、私なんかはぶつけていくのは、単に金光教のお話をしたいからということじゃなくて、江戸時代というものの民衆というものを見ていくためにも、必ずこの話はするんですけども、江戸時代の人々というのは、金光大神も含めて、そうなんだと私なりに理解しているんですが、神様の声が聞こえて、なおかつ、これはふつう誰でもできることではないにしても、一定のかなりの修練を積んだ人は、神様の声が語ることができたということ。そのことはやはり見ておく必要があるんじゃないかということをおっしゃいます。

ちなみにこれは、結構若い学生諸君にも受けていることなんです、「じゃあ、先生、どういうふうな訓練をしたらいいんでしょうか」と言うので、「それは私はよくわからない」という話をよくするんですけども、ただあまり良い例ではございませんので、もし間違っていたら、後でお叱りください。

現代人というのは、自分の思ったことを大声で正直に、わあっとしゃべる場所がないんじゃないかと。徳川時代には、そういう場所とか機会というのがあったんじゃないかなあということ、私がよく言うんですよ。現代だったら、甲子園球場くらいしかないんじゃないかと。やけくそになって、大声を張り上げて誰にも糾弾されない、誰からも近所迷惑だといわれない場所は、今は恐らくサッカー場か野球場くらいで、もし自分の住んでいる家でそれをやれば、近所迷惑になってしまうわけですね。これはどちらがいいって話をしているんじゃないかと、私はそういうことが何度も何度も繰り返されている中で、やっぱり自分の心の中で、おそらく自分も気がつかないといいますか、私はそう思っているんですけども、われわれ自身が気がつかないでいる自分みたいなものが、素直に出てくるというような、そういう瞬間というのが恐らくあるんじゃないかと、私はそういうふうに思っております。

それと、見えざるものとの対話をしたり、そういうものがもっと見えざるものが見えるようになると言いますか、あるいは聞こえざるものが聞こえるようになると言いますか、恐らくそういう事柄が江戸時代には一般的にあったんだろうというふうに思っているわけです。

で、そういうものとして、現代のわれわれの中に逆に迫ってくるものがあるんじゃないかと。つまり、そのことを通じて、そういう自分の心の奥底とか、見えざる、聞かざるものに対する恐れというんですか、これはこんな若造がこんなところで差し出がましいことを言うのも何なんですけども、現代の中では相当見失われてしまっている、そういうものに対する恐れというもの、畏怖に近いものみたいなものが、もう一つ、背景で支えているんじゃないかなと、今は理解をしております。

従いまして、現段階で果たしてこういう説明の仕方がいいのか悪いのか、私なりにちょっと自信がございませんが、一応いわゆる神懸かりというふうにいわれていることに関しましては、私はこういうものとして、大学では説明しております。正直にこれは申し上げます。

「病氣治し」の意味

それから、病氣治しの方も、金光大神のものを何度も何度も拝読させていただきながら、いつの日のことだったか覚えていませんけれども、突然ある日理解をしたんですね。最初、瞬間的には村上さんと似たような説明を使っていたことがあります。これは、要するに近代的な病氣観にもとづいていて、結局、病は気からというか、治ったような気になれば治ったんじゃないのという、そういうふうに説明したらいいんじゃないのという、村上重良先生はそういう説明だと思っただけですよ、どちらかといえば。治ったような気がしていたと。ないしは治ったような気にさせるのが上手な人たちであったと。私も実はそれでいいんだろうと、最初は思っていました。

ところが、いつだったか、どういう箇所に行き当たってか、あまり覚えていないんですけども、病氣というものが一体何なのか、という問いが出てきた。金光大神の『覚』の中には、難儀と申しますか、「いたが」ということが出てきます。あれは確か慶応三年だったと思いますけども、「日天四の下に住み人

間は云々」という、私なりの理解では、明治維新直前の教えをある程度整理をしている箇所の中に、「いたがあっては、家業できがたなし」という言い方をしたと思うんですけども。そういう難儀、あるいはいたが病気というものは、どうも現代人の考えている病気と意味が違うんじゃないか、ということのある日突然、はたと思いました。もし、病気の意味が違っているならば、それが治るということの意味も違うんだ、ということに気がついたんですね。

つまり、病気というものが現代的な意味での治るということであれば、これは医学的な意味です。たとえば、怪我が治ること、風邪が治ること、これは近代的な医学でいえば、対症療法的な治り方です。そういう意味の部分というのは、たぶんにあるんだろうと思います。従って、そこを基準に治るというものを見てきますと、結局江戸時代は説明できない、ないしは治ったような気になっとるんやろうということですね。本人は治ったような気になっとるだけなんだろうということですね。ほんとは治ってなかったんじゃないかとさえ言う人もいます。結局、そういうことになるわけですね。

ところが、意味が違くだろうということになりますと、病気というもの、それから病気にかかわるいろんな難儀というもの、それが何なのかと、逆に考えてみようということで、どういう形で治す、ないしは治るということを説いているんだろうかということから、逆に当時の病気をどういうふうにかんがえたらいのかについて、一生懸命テキストを読みました。結局、今は、次のように考えておるわけです。これも間違ってる部分があったら、ご指摘をいただければと思います。

「病気治し」が投げかけているもの

人間のさまざまな痛み、難儀ですね。そういったものを、ある意味では、自分の人生の中で、自然とのかかわりの中で、神々とかかわりの中で、あるいはいろんな人間関係の中で捉え返すということです。そういう事柄が、これは少なくとも極当たり前であるというか、そういうものとして説明をされる。これは、恐らく近代的な医学といわれているもの、ないしは近代的なわれわれの病気とのかかわりでは、完全に見失われてしまった視点なんだろうと。つまり、これは学生諸君にはわかりやすくするためによく言っているんですが、近代の

病気の治りというのは、簡単に言えば、機械の故障といっしょなんだと、部品を換えたらいいということですね。そういう物理的な治し方が、最近では部品を入れ替えることさえやる。要するに、臓器移植みたいなことになるわけです。あるいは、化学的な形で治すということですね。そうじゃなくて、そういった自分の生き様全体の中で、さまざまに自分に起こってくる事柄を考える。従って、そのレベルで治していかないと、治らないということですね。こういうことが、どうも徳川時代の、あるいは金光大神の『覚』『ご理解』などを読んでみると、そういうものとして理解をされていたのではないかということ、最近をよく言うんですね。

で、学生諸君にはわかりやすくするために、もうちょっと噛み砕いて言うんですけど、ここまで言うと噛み砕きすぎなんですけどね。よく、われわれ日常会話で、「風邪を引いてしまった」「なんで風邪になったの」と言うときに、「ウイルスに感染したんだ」と、ふつうは言わない人の方が多いと思うんです。「最近、ちょっと無理してから」とか、「最近、ちょっとストレスが溜まっていたから」という、これは今言った意味では、徳川時代的な説明にやや似ている。「ウイルスに感染したから」という言い方というのは、かなり近代的な言い方で、事実、お医者さんはそっちの方でしか治さないわけですね。

ところが、「最近、ストレスが溜まっていたから風邪を引いたんだよ」と言った場合、じゃあ、どうやって治すのかと言えば、安静に静養すれば治るということになるわけですが、風邪の場合はですね。ただ、そうじゃない場合というのは、もし、そういうものがより人生全体を揺さぶるような意味とか、あるいはさまざまなそういうものとの関連の中で問い返されるとするならば、これを治すというのは、医者にはもちろんできないし、これはとてもじゃないけど、尋常な人にはできない。あるいは、並大抵の人にはできない。これは、現代人なんか特にそうなんじゃないかと、私はよく言うんです。

すると、「じゃあ、それって、カウンセリングみたいなものなの」ということを学生は言う。私はそれでもダメなんだろうというふうに言ってるんですけどね。これは、カウンセラーの人に怒られるかもしれませんが。医者やカウンセリングとは違うだろうと思いますね。少なくともそういうものとして捉え返すと、これは徳川時代の人々の考え方といえますか、あるいは人々のそういうものというものが、私はかなり理解できたような、ないしはかなり近づけたような気がしました。もちろん、わかってしまったなどというようなことは毛頭申す気はございません。それは無理だったと思います。にもかかわらず、そういう事柄が少し理解されてきて初めて、実は私は、金光大神の『覚』のみ

ならず、他の宗教のものなども読み直すと、かなりすっと入ってくるようになったという気がしております。

そういったものが、最終的には、現代の私たちに投げかけているものについて、実は私自身も考えていかなければならないし、これは学生のみなさんにも考えて欲しいと思って話をしているんですね。そういったようなことが、何でも部品さえ換えればいような、あるいは人々にとって必ず固有のいろんなほんとは奥の深い関係の中で起こってくる問題みたいなものが、徳川時代のさまざまな世界の中では、ごく自然に、病気というのはそういう形で捉えられて、恐らくそういうことの中で、そのことがより根本的に、そのレベルまで含めて語ることが、当時の金光教祖もそうなんですけども、金光教祖ほどの方でなくても、修験道の方々でさえ、たぶんそのことはどっかで求められていたんだろうと思うんですね。そういうレベルでの説明なり、そういうレベルでの話をしないと、納得されないというか、恐らくそういうものとして考えていくべきなんじゃないかなということ、この問題に関しては、今はそう思っております。

今後も、考えていかなければならないなあと思っておりますので、とりあえず、歴史をやりながら、金光大神に出会って、特に『覚』の中で、特に神懸かりと病気治しについては、どういうふうになっているのかについて、ご紹介をさせていただいた次第です。

二、宗教について考えさせられたこと

西洋近代化の影響

私は歴史学をやっておりますけれども、学問的な感心それだけで生きているわけではないわけでありまして、もともとは歴史学の中で出会ったものではあるとはいえ、この二十年間、金光教、あるいは金光教祖とのかかわりというのは、私にいろんなことを考えさせてくれました。

プライベートなことで恐縮なんですけども、実は私の家は熱心なクリスチャンホームなんです。これは初めて申し上げます。なかなかこのことは、

金光教の研究所でもしゃべりにくくてしゃべれなかったんですけどね、長い間。ただ、教学研究soの方々とは、ほんとに親しくさせていただく過程の中で、この四、五年ほどですかね、ごく自然にこのような話をさせていただくようになったんですけども。

なぜ、そういう話をするようになったのかというと、これはもはや単に歴史学、学問の問題というよりは、私の中で、宗教、あるいは信心、あるいは救いとかいうことに関して、ずいぶん問われたり、考えさせられた部分があったんです。これはもちろん歴史の問題とも非常に関係があるんですけども。

一つは、金光教と出会うことによって、私は近代以降の歴史学、あるいは近代以降の宗教学、宗教史、宗教理解、ないしは神観念、神、こういったものがいかにキリスト教的なものに毒されているのかってことに、私は思い当たったんです。これは、もちろん自覚的にキリスト教というものが入ってきたわけでもないし、ご承知のように、日本のクリスチャンというのは、百万にも満たない、全部の人数ですね。カトリックからプロテスタントまで入れて、百万人にも満たない。これは、人口のパーセントにもなっていないということになるわけですけども。もちろん熱心なクリスチャンはいらっしゃいますけども、非常に取るに足らない勢力といってもいいかわかりません。にもかかわらず、近代文明、近代化というものは、西洋化として起こってきたわけですね。日本の学問といわれているものは、西洋の学問を入れて成り立っているわけです。宗教学が一番典型的だと思います。私は宗教学は専門じゃありませんけども、ただこういうことをやっていると、宗教学の先生方ともずいぶん出会う機会が多いですから、お話をさせていただいて、宗教学などは完全に西洋の概念、西洋のテーマとしながら、発展をしてきた。ちなみに、歴史学も実は同じです。歴史学という学問も、これは端的に言えば、近代歴史学というのはドイツから入ってきたものなんですね。ドイツの学問の方法、ドイツのやり方が、ベースにあります。中身は、それぞれの国の歴史によって違いますけど、要するに時代区分の仕方とか、史料の扱い方とか、あるいはどういうふうに時代を書くのか、本の書き方ですね。たとえば、今の小学校、中学校、高等学校の教科書も、全部ヨーロッパから入ってきたモデルに従って書かれている。つまり、政権の存在はどうなのか、どういう制度があったのか、これは明らかに中国の歴史書とは切れているわけです。中国の歴史書は、その意味では全然違う書き方をするわけですね。江戸時代までは、中国の歴史書に従った形式の本が日本でも出されていました。ともかく、日本の近代学問には、西洋の影響が強くなります。

それはそれとしまして、家がクリスチャンホームだった関係で、キリスト教の教育を小さい頃から、かなり厳格に受けて参りました。私は、それにはずいぶん反発してきたように思いますし、今でもどこかにその反発は残っているように思います。親父は、たぶん私に熱心なクリスチャンになってほしかった、熱心にキリスト教をやってくれることを願っていたんだろうということはわかります。ただ、そうはならなかったわけなんです。

神観念への近代化の影響

ところで、反発ばかりではなく、実は小さい頃から、キリスト教に触れてきたおかげで、今は感謝していることがあります。それは、キリスト教的なものが、私の中にも、さらにさまざまなところに入り込んでいるのがよく見えるということです。端的に申し上げますと、神様とは何かということなんですね。これは、長い間、私にはあまりに自明なものでした。つまり、無意識的に神様という、一神教的な、あるいは絶対神的な、あるいは最高神的な、さらにいえば、あるものというか、人間がいる前にすでにあるものというふうに見ることに慣らされてきた。これはおそらくクリスチャンとか関係なく、宗教学の中での神の説明なども比較的そういう説明をしているものが多いですし、どうも無自覚的にそういう理解をしているものが多いんじゃないかという気がするんです。ちなみに、私はさまざまな研究の書物などを読んでいまして、そういうものが無意識的に入り込んでいるのではないかなというふうに思っております。これは他人事ではなくて、私自身もそうだったと思いますね。

ですから、たとえば、天地金乃神様と言った場合、これは先ほどの村上重良先生であれば、これは一神教的な絶対神という説明をされると思います。しかも、そこに金光教の極めて近代的な性格があるというふうに評価をしておられる。もちろん、村上先生は亡くなられましたし、私もずいぶん学問的に影響を受けましたので、悪口ばかり言うのではないんですが、村上先生は、悪意でそういうことをおっしゃっているのではないんです。金光教というものが、近代の中でさまざま形で嫌がらせを受けてきた。そのことをもっときちんと正当な位置を与えたかったのではないか。たとえば村上さんの本を読んでも、すごくおもしろかったのは、戦前の国家は、金光教とか天理教をいかがわしい宗教だというふうに言うけれども、いかがわしいのは実は国家の側であって、

天皇制の国家の側が非合理的なものなのであって、反対にいかがわしい、いかがわしいと言われてきた金光教の方がはるかに近代的なんだということを、村上先生はおっしゃっているんです。私は、そこにある見方の転換ということを学んだんですけども、非常におもしろい、画期的な本だったと思います。ただ、如何せんそういう説明ですから、近代的性格だというのは、無意識的に、もっと言いますと、どうしてもキリスト教を基準とする西洋近代のような宗教にどれだけ近いのかっていう説明になるんですね。さらに、金光教の場合でいえば、信仰の内面化っていうことを村上先生はおっしゃいます。これは、「おかげは和賀心にあり」という教えが信仰を内面化していく。呪術的なものから内面的なものへ、これは非常に近代的なんだという説明をされるわけです。

働きとしての神

そういうことがありまして、われわれも次の次の世代になるわけですが、どうしてもそういう見方に左右されてきたんですね。実は「概説金光教」、今は新しい本が出たんですかね。私まだ精読しておりませんが、前の「概説金光教」を拝読させていただいているときに、これははっきり申し上げていいんですが、「概説金光教」を読んでいるときに学んだことなんです。「本教においては、神様はあるかないかは問題ではない」と、「働いているか働いていないかが問題である」という箇所を見て、ひょっとしたら金光教の内部の方々は当たり前のことかもしれませんが、私は、仰天しました。これは、一体どういうことなんだろうと。その「概説金光教」の記述から、正直に申し上げますけど、最近の論文ではさも自分の説のようにいろいろ言っているんですけど、そこから始まって、金光教、ひいては徳川時代の神様というものの全体を捉え直さなければだめだと、あるいは徳川時代の超越的なもの、この言い方がそもそもキリスト教的になってしまいうんですけども、ある人間を越えたいろんなものの説明ですね、そういうものは全部捉え返しをしないと、知らずキリスト教的な理解になってしまいうんじゃないかと、最近は思っている次第です。

実は、「概説金光教」を読ませていただいてから、働きとしての神様ということ、あるいは、これは『覚』の中にも出てくるわけですけども、神が生まれるということですね。生まれるということ、あるいは人が神になるということ、ないしは生神ということ。これは金光大神だけではなくて、さまざまな方々が

神号をいただくと、あるいは私の理解では、斎藤重右衛門などは笠岡金光大神ということなわけですから、少なくとも金光大神と同じ、ないしはそれに近い生神様のレベルになるという事柄。これも長い間、キリスト教的な理解ではよくわからなかったわけですね。

関係の中に立ち現れる神

神様が働いておられるかどうか問題なんだと、だからあるかないかではなくて、結局その神様というのは、人間の側が、あるいは人間と人間、人間と神様との間のお互いの問いかけみたいなものが、ないしはそこでのお互いの呼応関係みたいなものがない限り、世に現れないっていう。実はそういうことによって、初めて神様が現れる。で、現れた神様は、従って金光大神にお礼を言われるわけですね。金光大神のおかげで、私は世に現れることができるようになる、ないしは働くことが初めてできるようになる。その神様が働いているということも、金光大神と神様との関係の中で初めて働きが出てくる。働きが出てくることによって、初めてその神様というものが世に出るということですね。これは、正直言いまして目から鱗の状態でした。これはたぶん、「概説金光教」ですから、そんなに新しいものではなくて、ずいぶん前からそういうことが書かれておったんでしょうし、あるいはそういう目で「金光教学」をもう一度読み返しましたら、瀬戸美喜雄先生にせよ、その他の先生方が書いておられるんですけども、なかなかそういのは注目されない。読んだつもりでも、どうもそういうものがピッと入ってこない。

そういうことがありまして、以来、こういう神様の考え方、働くという神様の捉え方みたいなものは、ある意味では従来のキリスト教的な神様の考え方、ないしは極々当たり前のように研究者の中でもそうですし、またそういうもので捉えられたものに対しては、かなり大きな問いかけ、ないしはそこを根本的にひっくり返すようなものが、そこにあるんだと思っております。

ちなみに、私は大学でしゃべるのが商売ですから、徳川精神史なり徳川思想史という話をするときには、必ず働きというレベルから説明をし直すことに心がけている次第です。そういうふうには捉えないと、たぶん徳川時代のさまざまなもの、ちなみに金光大神もその中で、最初は崇りとかいろんなことが一方的

にやってくる関係から始まって、それがあるときに、そこに問いかけとお互いの呼びかけみたいなものが成り立って、その時に初めて、パッと世に出てくる神様があって、たぶんそれを金光大神というのは、そこに世に現れた神様との関係、それが働いているときに、実は神様のみならず、働かせている側も生神になるという、そういう関係に立っているんじゃないかなと、今はそういうふうに思っているんです。

研究への問いかけ

また当然、そういうものを信心の世界の中で、働きが働いてくるならば、当時の直信の方々ですか、当然そこに新しい神様が生まれてくるわけですね、働いてくる。働いてくることによって、たぶんさまざまな人たちもみなそれぞれに応じて神号をいただいて、その意味ではいろんな呼称が当時はあったようですけども、赤壁の金神様とか、いろんな言い方があるんでしょうけども、要するに生神様になってくるということですね。私はそういうふうになるんだろうと。これは、実は衝撃的なものであり、また江戸時代の理解にとっても非常に大きな問いかけをしているのではないかと思ったことなんです。あるかないかということでは、結局議論になってしまうわけですね。あるいは神学的な問題とか、哲学的な問題とかということではなくて、何よりも働いているか働いてないかなんだということが、自己反省の問題としても考えさせられたいうことを最後に正直に、この問題に関しては申し上げておきたい。結局、どうしても学問をやっている側ってというのは、あるかないかとか、どんなもんなんだとか、あるいは神様の性格を暴いてやろうという、ちょっと語弊がありますが、ある程度記述をしなければならぬから、どうしてもそういうことになりがちだったんですね。しかし論文ではそういう書き方になるんですけども、個人的な問題としては、考えてみたら、私なんかはどうなんだろうかという、そういう人生が送れているんだろうか、あるいはそういうことが私の中でなされているんだろうかということをも初めて考えさせられた。

ちなみに、キリスト教は違うんです。キリスト教は、あるかないかを受け入れるところで入信が成立するんですね。キリスト教というのは、神が存在し、同時に死後の問題があるんですが、そのことを全部神に委ねるかどうかが、洗礼の時の問いかけがそうです。神があることを汝信ずるかというのがキリスト教

の問いかけです。私は、それにある意味で抵抗を感じたんです。今でも感じています。そんなこと言われたって、信じるっていえば、信じるけども、死ぬまでそんなこと信じろと言われても、自信がないというね。ただ、働きという方は、どうもそうじゃないことが問いかけられている気がして、非常に気になって、ないしはずいぶん反省をさせられたということです。

三、教学研究所を訪問して

トップレベルの研究水準

実は私と金光教、ないしは金光大神との出会いの中で、もう一つ大きかったのは、金光教教学研究所との出会いということです。

ちょうど一九八十年代から九十年代ぐらい、もちろん今に至るまでなんですけども、教学研究所の渡辺順一先生をはじめ、さまざまな先生方と出会ったというのは、私にとって金光教というものを考えていくときに、あるいは金光大神を考えると、忘れられない出会いでありました。それは、「金光教学」、紀要です。それと、吉備乃屋さんです。

だいたいわれわれが教学研究所に教えていただきに行く、いろんなものを見せていただくときには、当然泊まりがけになりますので、吉備乃屋に泊まって、朝、あの坂を上まで登って、いろいろ資料を見せていただくということを、私の場合でも十回まではなっていないと思いますけども、相当の回数を通わせていただいたわけですね。そのときに、「金光教学」という紀要の持っているレベルの高さですね。そのレベルの高さが、まずびっくりしたということです。

ちなみに、キリスト教にせよ何にせよ、そうなんですけども、牧師先生方が教学機関をつくって出している雑誌というのは、私に言わせると本当にレベルが低い。要するに、学術研究をやっているのか、信者を増やすための話を書いているのか。非常に中途半端な出来上がりになっている本が、山のようにある。そういう意味では、私は誤解をしたことになるわけですね。水準の高さというのは、今でも私は確信していますが、日本で宗教法人が設立をしている教学

機関で、もちろん全部を見たわけじゃありませんけども、見てる範囲では、金光教の教学研究所の紀要がトップ、ないしはトップレベルではないかなと思っています。これは決して煽てでも何でもなくて、心底そう思っています。そういう意味では、『金光教学』というのは、非常に貴重なものであるということです。

研究所の先生方との交流

それに加えて、私が教学研究所で驚きましたのは、最初はよくわからなくて行っていたわけですが、教学研究所の先生方というのは、それぞれ教会長、教師なんだということです。それをもっと早く知っておけばよかったんですけども、最初は知らなかったんですね。最初は、学問研究をやっている人たちを集めた、シンクタンクみたいな場所なのかなと思っていたわけですが。だから、まあレベルも高いということで、学者とつき合っているような気安さができる。つまり、大学の先生たちと出会っているような気安さができる。それが、今から思えば、私のとんでもない誤解と、また迂闊だったんですけども、伺いますと、吉備乃屋というところで夜に差し入れという形で、教学研究所の所長先生をはじめ、いろんな先生方がお酒を持ってきて、そこで宴会が始まります。

私は、そこが迂闊だったというのはどういうことかと言いますと、そこでその瞬間、なかには顔が教会長になる方がいらっしゃるわけですね。結局、先生は何でこんなことをやっているんだと、何を目的にこの研究をやっているんだってことをギリギリと問いかけてくるわけです。これは、正直言って、大学の教員同士ではあり得ないことなわけですね。ふつうはそういうことは言わない。腹の中でくだらないことをやっているなと思っても、黙っているわけですよ。この人は何でこんなくだらないことをやっているんだろうと思っても、「あっ、素晴らしいですね」。ないしは、そんなギリギリと実存的な人の人生に干渉してくるようなことは聞かないんです。

ところが、教学研究所というのは、先ほど言ったように、学術的なレベルが高いと思いましたが、当然、学者の方たちが集まっている場所なんだろうと。で、教会長であるということが最初は気がつかなくて、迂闊だったというのは、そういうことなんです。結局そこで、かなりギリギリの問答がありました。

ある先生、名前は言いませんが、その先生に入信を勧められました。これは、私はフェアではないと思ったんですけどね。「いや、先生、教典などをお読みになって、これだけ金光大神のことを理解していただいているわけだから、入信しなさい」と言われたことがあります。あるいは、私は結婚したのがずいぶん遅かったんですけども、独身で三十代をいたときには、「先生、それは天地金乃神に対する罰ですよ。独身でいるということは、天地金乃神様に対して申し開きが立たない」というふうなことを言われた。そういう形で言われたのは、教学研究所だけですね。神様を持ち出して結婚すると、これも私には忘れられない思い出なんです。

楽しい体験

いずれにしても、ただでは済まないといいますが、つまり知りたいから知りたいのであるでは到底済まされない。結局、なぜあなたは、そういう研究をやっているのか、またそういうことによってあなたは自分の生き様をどうお考えですか、みたいな形で来る。これが実は、ある意味では途中からおもしろくなってきたというか、そういう機会、場というのは、正直言って私には全くなかったわけです。

これは、大学で職業としての教員をやっていますから、職業としての研究者として毎日が過ぎていく。私にとっては、教学研究所で先生方に、これは今でもそうなんですけども、今や教学研究所に行かなくても、いろいろな機会がありまして、ちなみに日韓宗教研究者シンポジウムっていうのが、教学研究所を中心に九十年代に入ってから始まりまして、つい二、三日間まで、私も渡辺先生もそうなんですけども、韓国に行ってみりましたけども。そうすると、今や教学研究所に行かなくても、いろんな機会ですらそういう投げかけをされる。これは私にとっては、考えさせられ、反省させられ、またありがたいということで、途中からこれが結構楽しくなってくるという体験をさせていただきました。

ちなみに、これもものすごく印象的に覚えていることなんですけど、京都駅で、夜、目の前を団参列車がダーッと来る。これ、今では私の中では映像化されているんです。暗がりに一人ポツリと立つ私、と。私はそこで何気なくふっとホームを見たら、団参列車がダーッと走っている。私は、それこそ教学研究所に

行って、金光教の勉強をさせてもらった後ですから、「あっ、金光教や」と、見たら思うわけですね。これは今からこの時間に行くのだから、そうするとだいたい朝の三時くらいに向こうについて、これはおそらく朝のお出ましに行くのかな、といろいろと想像をめぐらすことができる。それがすごく楽しそうなんですよ。ものすごく明るい。ただしご婦人方が多かったような印象があるんですけどね。今から二十年ほど前のことですかね。そのことを教学研究所でうっかりしゃべったんですよ。そしたら、教学研究所の先生が、「先生、なぜその列車に乗らないんだ」ということになるわけです。「あなた、入ったらええやないか。そんなに楽しそうだったら」。「そりゃあ待ってくれ」という話をしたことも何度もございます。

ただ、入信するかしないかはちょっとおくとしても、一番大事なことは、振り返りながら思うことなんですけども、教学研究所というところに行って、私が受けていたのは、学問的な恩なんですけども、われわれの業界では、学恩という言葉があるんですけども、学問のおかげということですね。おそらくそういう問題ではないものもたくさんいただいていたというか、あるいは途中からそれが楽しくて教学研究所に行っていたのではないかなと思います。

これは今のシルエットじゃありませんけども、教学研究所の先生方とお話をさせていただくことを通じて、私は自分の人生なり、自分の生き方なり、あるいは俺は一体何をやっているんだろうかと、何をしたいんだろうか、何がほんとに人間にとって幸せなんだろうかとか、果ては結婚の話まで出るんですけども、いろんな事柄について、そこで応答関係があって、それが私にとっては、ものすごく大きかったし、今でも大きいというふうに申し上げていいんじゃないかなと思います。それは、おそらく教学研究所の先生方とは、長いおつき合いをさせていただこうと、教学研究所の方さえご迷惑でなかったら、私の方がそういうふうに願っておりますし、またその中で、そういう関係というものも続けていけばいいんじゃないかなと思っています。

四、現代の中での金光教

最後になりましたけれども、歴史学の中で、あるいは教学研究所の中で、いろんなことを私なりに学ばさせていただいたわけなんですけども、もう一つ、

これは私の勝手な思い込みでしゃべらせていただくかも知れませんが、現代人といえますか、現代の中での金光教といえますか、私個人にとっての金光教といえますか、現代の中で、私が一番何に惹かれているのかということをお願いして、この話の最後にさせていただきたいと思います。

金光教というのは、「宣言」の中にもありますように、神と人との関係とか、人と人との関係とか、あるいは自然と人間との関係とか、非常に関係、先ほど言った働きというのも結局そうなるんですけども、関係ということに重きを置いた宗教なんではないかというふうに理解をしております。

これは、私がたまたま知り得ている宗教が極端なんですけども、キリスト教なんかで言いますと、キリスト教は横との関係をあまり言いません。それは邪魔になる場合が多い。完全に絶対的な神と人間ということしか言いません。そこで、とことん問いつめるというのが、キリスト教、少なくともそういうやり方をしているんだろうと、私は思います。これがいいとか悪いとかの話ではなくて、特色です。もちろん、仏教、ちなみにうちのかみさんは浄土真宗のやや熱心な信者です。浄土真宗なんかでも、ややそういうところはあるのかなという気もするんですけども、金光教というのはその辺が一番はっきりしているんじゃないかなと思っています。それは、「あいよかけよ」ということになるわけですけども、結局関係ですね。まず、神様と人間との関係というのが基本になっているんでしょうけども、ただ神様と人間というと、先ほどのキリスト教とどこが違うのかということになるわけです。どうも、金光教というのは、人間と人間との間に神が働く、神が生まれるというんですかね。つまり神様というのは、神と人間とでは、変な言い方ですけども、生まれてこないといえますかね。教祖を含めているんならそういう方はあるんでしょうけども、人間と人間との関係の中と言いますか、そういうものが非常に重視をされている、非常に大切にされている宗教なんだというふうに思っております。

そういう意味では、先ほどの団参列車の話じゃありませんけども、現代の中でそういうものが急速に失われていくことに対しては、残念で仕方がないというんですかね。これは小耳に挟んだ話ですけども、最近は和気藹々とした団参も前ほどではなくなったという話もうかがったものですから、今申し上げたんですけども、そういう関係の中で働いてくれるような、ないしはその関係的な間柄というか、間みたいなものを非常に大事にしてくる。それは、現代のわれわれの生き方などを考えていくときには、金光教を考える際には、非常に大切なことだと思います。そして、それが金光教のもっとも大きな特色なんではないかなと思っています。それが私にとって、非常に魅力でもある。

『覚帳』の一番ラストの方に、金光大神の言葉の中に、「神代」という言葉がありますけれども、この「神代」という言葉にもいろんな考え方があるんでしょうけども、結局、生き生きと人間と人間との関係、あるいはさまざまな神様が働き合えるような人間関係という、ないしはそういうところに神様が生まれる、次から次と生まれてくる。そういうものが金光大神の言う、つまり「神の教え通りをするものは、神になり」ということなんだろうとっております。それが、「神代」になっていくことなんだろうと思います。これは、私にとって非常に魅力的、かつ特徴的な金光教の姿なんだろうとっております。そういう意味では、現代の中では、相当その部分というのは、大きな役割を果たしていけるんじゃないかなと期待をしている次第です。

以上、原稿を書いてしゃべっているわけじゃありませんので、ややあっちこっち飛んだ部分がありますけれども、また私自身の勝手な思い込みでものを申し上げた部分、あるいはたいへん失礼なことを申し上げた部分もあるのかもわかりませんが、何とぞご寛容のほどをお願いしたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。